國學院大學学術情報リポジトリ

“Mutosu" and “muzu" in the classical Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000955

中古中世における「むとす」と「むず」

鈴木　薫

キーワード：むとす、むず、（よ）うとする、意味用法、変遷

1　はじめに

古典語における「むとす」は、もっぱら「（よ）うとする」という現代語訳が与えられる。中村(2018、2019)に指摘のある通り、「むとす」の全てを現代語の感覚で訳して良いかどうかについては慎重にならなければいけないが、「むとす」は「んとす（る)」「うとする」に形を変えながらも全時代を通して見られるので、現代語の「（よ）うとする」の起源を「むとす」に求めても差し支えないようである。一方、「むず」の起源については不明な点が多く、現在のところ明確な結論は出ていないが（山口1993)、「むとす」と似た意味用法を持つと考えられることがある（注１）。従来の研究では、しばしば「むとす」と「むず」の文体による差異が注目されているものの、意味用法の面から検討しようとしたものは比較的少ない。そこで本稿では、まず「むとす」の意味用法を現代語の「（よ）うとする」の意味用法と対照して観察し、その結果を「むず」にも適用することで、それぞれどのような意味用法を有するのかを確認する。そして、それらが時代を経るにつれどのように変化したのかについて考えることにする。

調査対象は、「むず」が文献に現れ始める中古から、その使用の増える中世までの和文作品とした（注２）。なお、中古作品の検索には国立国語研究所(2019）を用いた（注３）。

2　分類方法の試行　―現代語との比較から

2．1　現代語「(よ) うとする」

庵ほか(2001)では、「(よ) うとする」に次のような例を用い、意味を説明している。

(1)彼は子どもたちを医者にしようとしている。

(2)お金を払おうとしたら、財布がなかった。

(3)真っ赤な夕日が水平線に沈もうとしている。

(4)長かった冬が終わりを告げようとしています。

(下線は原文のまま引用)

(1)(2)は、「意志的な行為を表す動詞に付いて、その行為が試みられたがまだ達成されていないことや、ある行為が行われる直前であることを表」すとし、(3)(4)は、「自然現象など無意志的な出来事を表す動詞に付」き、「その出来事が起こる直前であることを表」すとしている。しかし、(1)～(4)はさらに詳細な分類ができるのではないだろうか。(1)(2)は、(1)が表現主体以外の意志、(2)は表現主体の意志という点で異なる。また、(3)(4)に対しては「自然現象など」と説明されているが、以下の(5)のように、有情物である人間の無意志的な出来事についても表現することができる(注4)。

(5)「両親が病気で死のうとしているとき、もうだめだと思っても、看病のかぎりをつくすではないか。…」　(「明治」という国家・上、p.62)

すなわち、現代語の「(よ) うとする」には、一人称以外で意志的行為を表す例 (これを〈他者の意向〉と呼ぶ)、一人称で意志的行為を表す例 (これを〈自身の意向〉と呼ぶ)、人称問わず、無意志的な成り行きを表す例 (これを〈実現への推移〉と呼ぶ)、という3つの意味を表すことができるということになる。

2．2「むとす」

次に、古典語の「むとす」の実態を確認するため、現代語の「(よ) うとする」の3つの意味について「むとす」でも同様の用法が見られるかを確認す

ると、以下のような例が得られた。

(6)大夫監は、肥後に帰り行きて、四月二十日のほどに日取りて来むとするほどに、かくて逃ぐるなりけり。　（源氏物語・玉鬘、p.99）

(7)…（侍従ガ）「撫子の種取らむとしはべりしかど、根もなくなりにけり。呉竹も、一筋倒れてはべりし。つくろはせしかど」など言ふ。

（蜻蛉日記、p.252）

(8)夜やうやう明けなむとするほどに、…　（伊勢物語、p.174）

(6)は三人称である大夫監が日を選んで玉鬘を迎えに来ようという場面で、〈他者の意向〉に通ずるものである。また、(7)は「撫子の種を取ろうとしましたが、…」と、一人称の意志を逆接で続けているものなので〈自身の意向〉、(8)は「夜が次第に明けようとする」という意味で、「夜が明ける」事態の実現する直前を表しており、〈実現への推移〉となる。

以上の３例は、いずれも現代語「（よ）うとする」と共通する表現であったが、「むとす」には「（よ）うとする」では表さない、以下の(9)(10)のような例も見られる。

(9)…（僧ゑしうハ）「行ひしに深き山に入りなむとす」といひていにけり。　（大和物語、p.282）

(10)…（冷泉帝ハ）唐土には、顕れても忍びても乱りがはしきことと多かりけり。日本には、さらに御覧じうるところなし。たとひあらむにても、かやうに忍びたらむことをば、いかでか伝へ知るやうのあらむとする。…などよろづにぞ思しける。　（源氏物語・薄雲、p.455）

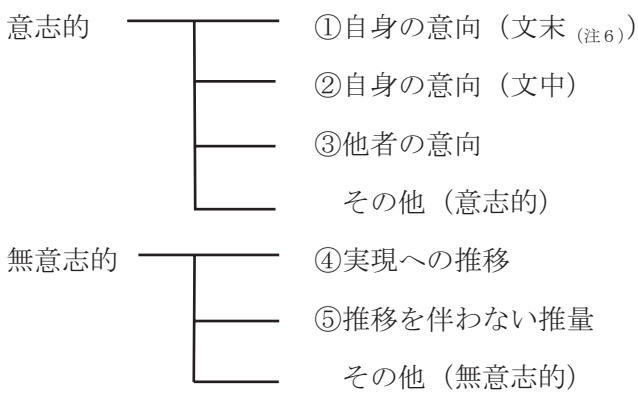
(9)は、僧であるゑしうが「深い山に入る」ことを行おうと言っている場面である。これは発話者自身の意志であり、その点では(2)(7)と共通しているが、それらが文中で用いられているのに対して(9)は文末で用いられている点で異なる。このように、自身の意志を文末「（よ）うとする」で表現することは現代語ではしない（注５）。したがって、〈自身の意向〉は先に挙げた文中用法と、(9)のような文末用法とで区別する必要がある。

一方、(10)は、自身の出生の秘密について悩む冷泉帝の心内文で、日本では帝王の血統の乱れがあったとしても、伝え知る術はない、と考えている場

面である。主語「伝へ知るやう」が無情物という点では(3)(4)(8)と同じである。しかし、それらがある出来事の実現する直前を表すのに対し、(10)はそのような時間軸上にはなく、「どうして伝え知る術があるだろうか（伝え知る術はない）」といった、存在の有無を問題にしている。つまり、この「むとす」は実現に向かうといった意味ではなく、時間とともに変化することのない事態について推量しているのである。これを本稿では、〈推移を伴わない推量〉と呼ぶことにする。

このように、「むとす」には少なくとも以上の５つの用法が認められるようである。これらの中で、現代語「（よ）うとする」にも認められる用法が②③④であり、①⑤が古典語特有の用法であった。また、①～⑤とは少々異なる意味用法を持つと考えられる例を「その他」とした。以上をまとめたのが下の図である。

①は文末で自身の意向が述べられている点で、助動詞「む」で表されるような純粋な〈意志〉と同じである。②は直接的に表現主体の意志を表さない点で純粋な〈意志〉表現とは言えないが、意志的な用法ではある。また、③はひとまず意志的行為の表現と見るが、厳密には他者の意向を表現主体は知



り得ないため、〈推量〉にも通ずる用法であると考えられる。中村(2018、2019)の、基本的に「むとす」が三人称主体の場合は全て推量でとるべきだが、限られた一部で意志とも読み取れる例がある、といった主張は、このようなところに関わると思われる。また、④については、これから起こるという点では不確実であり、また無意志的な事態ということから、①～③の意志的表現に対して、推量的表現となる。ただし、近い未来に自然とその事態が実現するという意味のため、不確定要素が少ないという特徴がある。一方で、⑤は状態や性質、存在などのほか、時間的推移に左右されない事態を推測しているものであり、助動詞「む」で表されるような〈推量〉表現と同じである。

２．３ 「むず」

次に、「むず」について見ていく。前節の「むとす」の分類方法を「むず」にも適用し、分類が可能であるかを確認する。すると、以下の例が得られた。(11)は①〈自身の意向（文末)〉、(12)は②〈自身の意向（文中)〉、(13)は③〈他者の意向〉、(14)は④〈実現への推移〉、(15)は⑤〈推移を伴わない推量〉である。

(11)…（昭宣公ハ)「げにいとよき所なめり。汝（＝貞信公）が堂を建てよ。我はしかじかのことのありしかば、そこに建てむずるぞ」と申させたまひける。（大鏡、p.351)

(12)（松陰中納言ガ）明石に着かせ給うて、「去年の今日も、ここにて月をこそ、見つれ。今宵もさこそ、あらんずれども、所を変へてこそ」とて、急がせ給へり。（松陰中納言・巻３、p.118)

(13)かぐや姫のいはく「…今は、帰るべきになりにければ、この月の十五日に、かの元の国より、迎へに人々まうで来むず。…」といひて、…（竹取物語、p.66)

(14)…（堀河帝ハ)「いみじく苦しくこそなるなれ。われは死なんずるなりけり」とおほせられて、…（讃岐典侍日記、p.415)

(15)いかなる人かは、この頃、古今・伊勢語など覚えさせたまはぬはあらむずる。（大鏡、p.29)

(11)は、寺を建立するのに最適な場所を見つけた貞信公に対し、父昭宣公が言った言葉である。自分はこれこれのことがあったから、貞信公が見つけた場所ではなく以前から決めていた所に建てる、という自身の意向を文末「むず」で表現している。一方、(12)は但馬の守が娘を別の場所へ移動させるために所違えをしているところであり、自身の意向を文中で表している。(13)はかぐや姫の発話文で、月の国の人々が自分を迎えに来ると言っている場面である。来るのは月の国の人々の意志によるものであり、③〈他者の意向〉の用例としたが、これは「来るだろう」と訳すことも十分想定され、むしろ〈推量〉と考えるほうが一般的かもしれない。しかし、2．2で述べたように、③にはより意志的な用法と、より推量的な用法が混在している。本稿ではひとまず、「むとす」との分類を基準にするため、「来る」という事態が自分以外の意志的なものであることを重視した。(14)は堀河帝の危篤の場面で、段々と苦しくなることで自分の死期を察している。「死ぬ」という事態に向かっていることが読み取れるため、④〈実現への推移〉となる。(15)は、近頃に古今集や伊勢物語を知らない人はいない、という意味であり、存在を問題にする「あらむずる」には実現に向かうといった意味はなく、⑤〈推移を伴わない推量〉となるのである。

以上のように、「むず」においても、①～⑤の各用例を見出すことができた。そこで次節では、これらの分類をもとに「むとす」と「むず」を歴史的に観察していくことにする。

3 「むとす」と「むず」の変遷

2節で試みた分類方法によって中古から中世までの「むとす」と「むず」を分類した結果が、それぞれ【表1】と【表2】である。

【表１】「むとす」の用法別分類結果

		中古	中世前期	中世後期
意志的	①自身の意向（文末）	14　(5.1)	2　(1.8)	1　(0.8)
	②自身の意向（文中）	38 (13.8)	3　(2.8)	11　(8.7)
	③他者の意向	153 (55.4)	85 (78.0)	103 (81.1)
	その他（意志的）	5　(1.8)	2　(1.8)	0　(0.0)
無意志的	④実現への推移	43 (15.6)	11 (10.1)	12　(9.4)
	⑤推移を伴わない推量	23　(8.4)	6　(5.5)	0　(0.0)
	その他（無意志的）	0　(0.0)	0　(0.0)	0　(0.0)
合　計		276　(100)	109　(100)	127　(100)

【表２】「むず」の用法別分類結果

		中古	中世前期	中世後期
意志的	①自身の意向（文末）	15 (23.4)	7　(7.2)	18 (15.1)
	②自身の意向（文中）	0　(0.0)	2　(2.1)	15 (12.6)
	③他者の意向	16 (25.0)	26 (26.8)	20 (16.8)
	その他（意志的）	6　(9.4)	7　(6.9)	9　(7.6)
無意志的	④実現への推移	12 (18.8)	11 (11.3)	9　(7.6)
	⑤推移を伴わない推量	15 (23.4)	43 (44.3)	35 (29.4)
	その他（無意志的）	0　(0.0)	1　(1.0)	13 (10.9)
合　計		64　(100)	97　(100)	119　(100)

３．１　「むとす」の基本的意味用法（①～⑤）

まず、中古について見ると、最も用例数が多く中心的な意味といえるのは③であることがわかる。ただし、これは中古の「むとす」276例中の約半数が地の文であり、三人称主語が多いことも多少の影響があるかもしれない。そもそも、「むとす」が地の文に用いられやすいことは、すでに先行研究でも指摘されている。しかし、③の153例のうち、地の文以外も55例と、他の用法に

比べて③が最も表現されやすいことには変わらない。そして、③に次いで多く用いられているのは、②と④である。③と比べると数は格段に減るが、どちらも少なくはない。また、①と⑤については他の用法と比べるとかなり少ないが、現代語「（よ）うとする」では表さない①と⑤が、古典語「むとす」である程度まとまって見られるということは、注目すべき点である。

次に、中世前期について見てみる。中古において約半数を占めていた③はさらに数を増やし、全体の８割弱を占めるようになった。その一方で、③以外は全て減少したが、①～⑤の用法はいまだに用例が見られる。「（よ）うとする」で表せる②が中世前期の「むとす」でほとんど見られないことに関しては、後期では一定数見られることから、衰退したのではなく、前期の109例中80例が地の文であるために、あまり見られなかったと考えられる。

そして、中世後期の「むとす」だが、圧倒的に③が見られたほか、②と④も確認ができた。①についても１例存在するが、助動詞「なり」が後接する例であった。

(16)…（覚然上座ハ）「旁、所存ありて、其宿所に宿りたると聞者どもを、今夜忍て討たむとする也。…」とぞ、したゝかに云含ける。

（あしびき、p.54）

今回の調査では、助動詞が後接したものも文末として扱っているため、(16)の例も①となる（注７）。しかし、「なり」は指定辞として現代語「のだ」に相当する。「のだ」は「（よ）うとする」に後接して一人称主語の文末で用いることができ、そのため、助動詞「なり」も他の助動詞とは同様に扱うべきではない。したがって、①も⑤と同様、中世後期には見られなかったと言うことができる。既に述べた通り、現代語「（よ）うとする」は②③④の用法しか持っていないため、中世後期の「むとす」の意味用法は、現代語と同じものであったということになる（注８）。

３．２　「むず」の基本的意味用法（①～⑤）

次に「むず」について見ていく。「むず」は助動詞「む」と同様に扱われることがあるため、ここでは適宜「む」との比較も交えて考えることにする。

【表２】の通り、中古で確認できた用法は①③④⑤だが、いずれもほぼ同程度に用いられていることがわかる。また、「むとす」においてあまり見られなかった①と⑤が全体の約1/4を占めることは、この点については「むとす」と異なり、助動詞「む」と近いはたらきをしているということを示している。しかし、③と④については助動詞「む」にはない「むとす」に特徴的な用法であり、その点では「むとす」に近似しているということができる。②は確認できなかったが、そもそも「むず」は活用形に制限があるため文中用法自体が少なく、全64例のうち、文中用法は７例しかないために偶然見られなかった可能性が高い。

中世前期になると、全体的に数的な差のなかった中古と比べて、⑤のみが著しく増加している。また、③はほとんどその割合を保っており、その一方で、①と④は大幅に減少した。ただし、助動詞「む」と共通する①は、中古・中世前期を通して「むとす」よりも「むず」のほうが用いられやすいようである。②に関しては中世前期になってわずかに用例が見られたが、これは全体数が増加したために現れたものであり、中世になって新たに獲得した用法とは考えられないだろう。

中世後期では、①と②が増加したほかは減少している。ただし、⑤は減少しながらも約3割を占めており、やはり最も用いられやすい表現であることに変わりはない。①の増加も合わせると、助動詞「む」で表せる①と⑤の存在に注目される。②については「む」では表せないが、①と②との差は後に文が続くかどうかであり、「むず」の活用形には制限があるとはいえ、「む」にはない活用もある以上「む」との相違があって当然である。また、③は①以上に用例が見られるが、何度も述べるように、厳密には他者の意向は表現主体にとって未知のため推量に通じることに起因し、実際、通常は推量で解釈すると思われる例も多く含まれている。そして、最も用例の少ない④は中古から減少し続けており、現代語「（よ）うとする」に特徴的なこの用法は、「むとす」とは異なり、「むず」では表しにくくなっていったということが読み取れる。

また、「むず」の変化について、注目すべき点がある。⑤〈推移を伴わない推量〉のうち、中古と中世前期の「むとす」は非疑問文に比べて疑問文が多

く（疑問文／非疑問文が、中古は18例／５例、中世前期は４例／2例、中世後期は用例なし）、中古の「むず」も疑問文が多いが、中世では逆転して非疑問文が多くなっている（疑問文／非疑問文が、中古は13例／２例、中世前期は13例／30例、中世後期は６例／29例）。このように、中世の「むず」は「むとす」と異なる様相を呈している。この事実が何を示すのかは現在のところ明らかではないが、「むず」の意味用法の変遷に関わるため、さらなる検討が必要である。

４　「その他」―派生的意味用法

さて、これまで①～⑤に分類することが難しいとして「その他」に一括していたものを、ここで検討する。〈適当〉と〈未実現・仮定〉の２つがある。

４．１　適当

まず、〈適当〉と解釈し得る例について考える。中古の「むとす」に５例、「むず」に６例、中世前期の「むとす」に２例、「むず」に６例、後期の「むず」に６例あった。

そのほとんどに共通する文法的条件は、「一人称の意志的行為であり、なおかつそれを疑問文で用いている」ということである。これは上記の用例中、中古の「むとす」全５例、「むず」の内２例、中世前期の「むとす」全２例、「むず」の全６例、後期の「むず」の内１例があたる。以下に用例を挙げる。

(17)は兵部の君が今後の玉鬘の扱いに苦慮する場面、(18)は、前斎宮が邸の中で男の扇を見つけ、自身の姿を見られたのではないかと取り乱しているところである。

(17)（兵部の君ハ）この人（＝玉鬘）をも、いかにしたてまつらむとするぞとあきれておぼゆれど、いかがはせむとて急ぎ入りぬ。

（源氏物語・玉鬘、p.102）

(18)…（前斎宮）「こ（＝扇）はたがぞや。いかなる人のここまで寄り来けむ。あな恥づかし。あらはなるものを。見えやしけむ。…いかがせむずるや」とのたまふ。　（我が身にたどる姫君（下）・巻6、p.83）

(17)は「どうお育て申し上げようとする（のがよい）か」、(18)は「どうしようとする（のがよい）か」と、いずれも「～しようとする（のがよい）か」と解釈したものである。

また、類似した表現として、自らのこれからの行為を「どうしよう」と自問するのではなく、「どうしたらよいか」と相手に問いかけているものもある。これは中古の「むず」６例のうち３例があたる。(19)は、作者が父倫寧の家で長精進をしているときに、５月になって、留守居の侍女が菖蒲を軒に葺くべきか尋ねてきた場面、(20)は、白河院から出仕を仰せつかった作者長子が、それを人に相談する場面である。

(19)五月にもなりぬ。わが家にとまれる人のもとより、「おはしまさずとも、菖蒲ふかではゆゆしからむを、いかがせむずる」と言ひたり。

（蜻蛉日記、p.223）

(20)頼みたるままに、例の人呼びて、（長子）「かうかうなん院（＝白河院）よりおほせられたるを、いかがはせんずる」といへば、…

（讃岐典侍日記、p.432）

(19)は、実際にはその後返事をした描写はないが、離れた場所にいる侍女がわざわざ聞いてきたことである。また、(20)は相談するために人を呼び、実際にその人物はその後意見を述べているのである。つまり、これらはいずれも答えを求めて「私はどうしようとする（のがよい）か」と尋ねたことになる。これらは、その問いが他者に向けられているところに(17)(18)との違いがあるが、自身の意志を疑問するという点で共通し、〈適当〉の意味を感じさせる要因は同様であると考えられる。

(19)(20)のような「むず」の用法に関して、田中（1995）に同様の指摘があり、そこでは「自らの意志を他者に問いかけたり訴えたりする」、「表現主体の意志に基づく動作のあり様を「どうしよう」と問うもの」、としてその用法を認めている。田中（1995）は他者への問いかけの場合に限った指摘であるが、(18)のように、回答を求める相手がいない場合にも用いることができ、さらに、(17)のように「むとす」も同様の用法があると言えそうである。

これらの用法は、自身の意志を疑問する、すなわち、「（自分が）しようと

する」ことに対しての正否に考えをめぐらしていることで、〈適当〉の意が読み取れるようになると考えられる。そのため、一人称の意志を表している点では①や②と共通するが、疑問表現を伴い、それにより通常と異なる表現をしていると見られる点で①②と異なるため、特別に扱った。

しかし、そのように疑問表現を伴わずに用いられているものもある。これは中古の「むず」に１例、中世後期の「むず」に５例見られた。(21)は、重体となった堀河天皇が、側にいる右大臣に対して指示を出している場面、(22)は、山の井と藤の内侍の仲介役の侍従が、山の井を部屋に入れる際、側にいた幼君はそこに留まるようにと言い聞かせる場面である。

(21)（堀河天皇）「…また、さぶらはんずらんことは、何ごとも今宵さぶらふべきぞ。明日明後日さぶらふべき心地しはべらず」

（讃岐典侍日記、p.395）

(22)人をしづめて、侍従、（山の井ノ）御袖をひきて、「をさな君は、そこにゐ給はんずれ。我もやがて帰り来ん」とて、入れ奉る。

（松陰中納言・巻１、p.15）

(21) は、新編全集の現代語訳で「しておいたほうがよいであろうことは」、頭注で「暗に譲位のことをいう」とあるものの、直訳での理解が困難なため〈適当〉として良いかどうかに疑問が残る。ただし、〈適当〉ととるとすれば、これが今までの例と異なるのは疑問表現を伴っていない点である。また、(22) はそれだけでなく、二人称の意志的行為を表現しているのである（文中に「こそ」のない已然形終止の破格の語法ではあるが)。このように、相手のこれからの行為に対して指示を出している例は「むとす」には見られない。特に(22)については、むしろ(23)のように助動詞「む」に近い用法と考えられる。(23)は『源氏物語』の例で、源氏がある直衣を夕霧に着せるよう、花散里に勧める場面である。

(23)（源氏）「（コノ直衣ヲ）中将にこそ、かやうにては着せたまはめ。若き人のにてめやすかめり」　（源氏物語・野分、p.282）

このように、(22)は、(17)～(20)の用法が「むとす」の意志表現の延長に考えられたこととは異なる。すなわち、「むとす」と同様の〈適当〉を表して

いた「むず」が、少なくとも中世後期では、いわゆる「む」の〈適当〉を表現するようになったのである。

４．２　未実現・仮定

また、〈未実現〉や〈仮定〉と考えられる例が中世前期の「むず」に２例、後期の「むず」に16例存在した。(24)は中世前期の例で、年の暮れに、中納言が次に姫君と会うときのことを考えている場面、(25)と(26)は中世後期の例で、それぞれ、戒律を保てるかどうかを弁慶が自らに問いかける場面と、山烏の太郎が知人へ協力を求めるよう進言する場面である。

(24)今宵はかくて明けなん春もいつしか（姫君ノモトニ）まぎれゆくべきやうもなく、（会ウ日ガ）遥かならんずる心地して、夜の間に変はる春の気色に、拝礼、臨時客など、ことしげく、一、二日も過ぎぬ。

（浅茅が露、p.210）

(25)…（弁慶）自ら答へて曰く、「殺生戒とは、物の命を殺さぬ戒めございなれ。何と思ふとも憎からむずる物を殺さずしては、こらへまじければ、殺生戒をば保つまじ。…」とて、…

（弁慶物語、新大系（下）、p210）

(26)…（山烏の太郎）「…所存には、とても一門広し知音多し。一大事と仰せられんずるに誰か見はなし申候べき。…」と言ふ。

（鴉鷺物語、新大系（上）、p.107）

(24)の「遥かなり」はまだ決定した事実ではなく、(25)も「憎いもの」を想定しているだけであるため〈未実現〉であり、(26)は「一大事と仰るとしたら」と〈仮定〉で理解できる例である。いずれも文中用法であり、このような例も、助動詞「む」に見られる用法である。

(27) 思はむ子を法師になしたらむこそ、心苦しけれ。　（枕草子、p.32）

しかし、そもそも「むとす」の「む」は「と」で受けているため、本来文末としての推量、もしくは意志しか表さなかったはずである。本稿でも、大きくは①②③は意志として、④⑤は推量として考え得るものであり、前節で述べた〈適当〉を表す背景も合わせて考えると、全ての用例は①～⑤に当て

はまるものであった。ところが、「むず」はそれ以上分解ができないため、一語と捉えられた結果「む」とその用法が近づき、〈未実現〉や〈仮定〉といった文中で用いられる、意志や推量で解釈できない例が見られるのではないだろうか。このような用法が中古で見られなかったのも、「むず」はその時点では「むとす」と意味用法が近かったためであり、中世になって「む」により近似したことで表現できるようになったものだと考える。

5　おわりに

本稿では、はじめに「むとす」と「むず」の分類方法を検討し、それに基づいた分類結果から、中古と中世前期・後期でどのような意味用法の変化があったのかを考察した。以下にまとめる。

a.「むとす」は現代語「（よ）うとする」との比較から、現代語と同様の自身の意向を文中で表すもの（＝②〈自身の意向（文中）〉）、他者の意向を表すもの（＝③〈他者の意向〉）、事態が実現に向かっていることを表すもの（＝④〈実現への推移〉）のほか、自身の意向を文末で表すもの（＝①〈自身の意向（文末）〉）、推移に重点のない事態について推量するもの（＝⑤〈推移を伴わない推量〉）といった、古典語「むとす」に特有の意味用法がある。

b.「むず」も「むとす」と同様に、①～⑤の意味用法を認めることができる。

c. ①～⑤のほかに、「むとす」には〈適当〉、「むず」には〈適当〉や〈未実現・仮定〉と考えられる例も存在するが、その意味を表す事情はそれぞれで異なる。

d.「むとす」は、中古で上記 a に示した５種の意味用法を持っていたが、中世前期になると古典語特有の①⑤が減少し、中世後期では現代語「（よ）うとする」と同じく②③④のみを表した。

e.「むず」は、中古では「むとす」に近い部分もあったが、次第に①と⑤に比重が移り、全体として「む」に近づいた。

f.「むず」に、〈未実現・仮定〉や〈適当〉といった、意志や推量で解釈しにくい用法が中世全般で見られるようになったことは、「むず」の一語化が進み、「む」の用法に近づいたことを示している。

注

1　小学館『日本国語大辞典 第２版』の「むず」の項では、「「むとす」の原義のほか、「む」とほとんど同じ意味にやや強調の気持をこめて用いられる。」とあり、また、「①話し手自身の意志や希望を表わす。…しようとしている。」といった「むとす」を意識した訳も見られる。

2　調査資料は以下の通りである。

中古……竹取物語、古今和歌集、伊勢物語、土佐日記、大和物語、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡讃岐典侍日記（以上、小学館新編日本古典文学全集）。中世前期……あきぎり、浅茅が露、海人の刈藻、いはでしのぶ、石清水物語、木幡の時雨、風につれなき、苔の衣、恋路ゆかしき大将、山路の露、小夜衣、しのびね、しら露、雫ににごる、住吉物語、とりかへばや、風に紅葉、むぐら、松陰中納言、夢の通ひ路物語、夜寝覚物語、我が身にたどる姫君（以上、『中世王朝物語全集』笠間書院）。中世後期……文正草子、鉢かづき、小町草紙、御曹子島渡、唐糸草子、木幡狐、七草草紙、猿源氏草紙、ものくさ太郎、さざれ石、蛤の草紙、小敦盛、二十四孝、梵天国、のせ猿草子、猫の草子、浜出草紙、和泉式部、一寸法師、さいき、浦島太郎、横笛草紙、酒呑童子、をこぜ、瓜姫物語、鼠の草子（以上、『御伽草子集』小学館日本古典文学全集）、橋立の本地、磯崎、熊野本地絵巻、中将姫本地、長宝寺よみがへりの草紙（以上、『室町物語草子集』小学館新編日本古典文学全集）、あしびき、鴉鷺物語、伊吹童子、岩屋の草子、転寝草紙、かざしの姫君、雁の草子、高野物語、小男の草子、西行、さゝやき竹、猿の草子、しぐれ、大黒舞、俵藤太物語、毘沙門の本地、弁慶物語、窓の教、乳母の草紙、師門物語（以上、『室町物語集』岩波書店新日本古典文学大系）。

3　検索方法は以下の通りである。①「むとす」…［キー］語彙素読み「ム」、［後方共起１］語彙素読み「ト」、［後方共起２］語彙素読み「スル」（『落窪物語』は、本文作成の際の方針で心内文が〈〉でくくられているため、上記の検索方法の［キー］の直後に、［後方共起１］語種「記号」を入れた検索もした）。②「むず」…［キー］語彙素読み「ムズ」。なお、白居易「琵琶行」の漢文訓読をもととする「むとす」１例（枕草子、p.134）、『枕草子』の「むとす」と「むず」の使用に関する話題中の「むとす」３例、「むず」２例（枕草子、p.325）は除いた。

4　検索は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）による。

5　訳語を「（よ）うとしている」にしても、現代語で表現しないことに変わりはない。しかし、現代語の場合、過去形であれば、一人称文の末尾で意志を表すことも可能である。

・「…コウスケに、私は（倖せになりなね）と声をかけようとしました。」（上條さなえ

『子どもの言葉はどこに消えた？』）（BCCWJ）

このような事実に対し、永井鉄郎（1997）は、「この文脈（引用者注：三人称では許容される、文末が現在形で意志を表す文脈）であっても一人称の主語は現在形とともには用いず、過去の事実を客観的に描写する場合でなら一人称でも用いるようである」（p.191）と述べている。古典語でも通用するのかは不明だが、本稿における調査では、①〈自身の意向（文末）〉としたものの中にも、過去の助動詞の下接したものを含んでいる。

6　「むとす」「むず」に終助詞や助動詞が後接したものも文末として扱う。

7　本稿での調査範囲において、「むとす」の①の中で断定の助動詞「なり」が後接した例は(16)の１例のみである。また、「むず」①に「なり」が後接している例は、中世後期に１例ある。

8　近松の世話浄瑠璃（新編日本古典文学全集『近松門左衛門集』による）では、「むとす」全112例中、②が３例、③が103例、④が６例と、現代語「（よ）うとする」と同様の意味用法となっている。

参考文献

庵功雄，高梨信乃，中西久美子，山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

国立国語研究所（2019）『日本語歴史コーパス　平安時代編』バージョン2019.03 http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/heian.html

田中雅和（1995）「ムトスとムズの表現性―院政・鎌倉の片仮名文資料を中心に―」『国文学攷』148

永井鉄郎（1997）「「～ようとする」の意味と用法について」『日本語教育』92

中村幸弘（2018）「「〈…む〉とす」表現の読解と問題点―主体の人称と意志の有無とに注目して―」『國學院雑誌』119・6

中村幸弘（2019）「第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現の読解―その「む」の多くを意志と認識するのは共同幻想か―」『國學院雑誌』120・3

日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典 第２版』12、小学館

山口佳紀（1993）『古代日本文体史論考』有精堂